

## 追悼

### 日笠 端教授追悼

(社)日本都市計画学会名誉会員 井上 孝

東京大学名誉教授日笠 端先生が、喜寿をすまされ、時を経ずして他界せられた。惜しみても余りあることであり、謹んで哀悼の意を表する。

先生と私は、殆ど同時代を生きた。山腹の雪原を滑降する2つのスキーの描き出すシュプールが、時に交差した両方に分かれて行くように、私共の都市計画に於ける足跡は、交差しては離れ、離れてはまた交差するコースを辿ってきた様に思われる。日笠先生は、酷暑の7月に、現在の中国東北部の撫順に生まれ、私は、それより3年前の7月、ニューヨークの郊外に生まれた。共に外地生まれであるにも拘わらず東京で育ち、先生は東京のど真ん中の秀才校且つ受験校の誠之小学校に通い、私は、東京郊外のその当時だけ受験校と評判の高かった大井小学校に学んだ。先生は7年制と言われた最短距離で大学に入学出来る府立高校より東大建築学科に進み、私は、旧制一高の寮生活に憧れ、折角合格した府立高校を恩師や親たちそして府立高校当局の説得をもはねのけて、府立一中に進んだ。そして望み通り一高生活を満喫して、多少の足踏みの後、東大の土木工学科に入学した。私は昭和17年9月、日笠先生は翌年の9月卒業。日笠先生は陸軍の技術将校、私は海軍技術士官として服役した。

戦後、都市計画の官途に就いたが、建設省系統でも、建築と土木に分かれており、先生は一貫して、建築研究所に立てこもり、私は都市土木の幾つかの分野を彷徨した。始めて意見の交換をするような共同の仕事は、建築研究所の主導で都市計画研究連絡会が発足し、若き日笠先生は、会場が建築研究所であった関係で、此の集会の世話掛となった。この連絡会は、私にとっては少なからぬ活力の源泉であった。というのは、庁内で強引に英国留学を希望する私は、土木系の上司から総スカンを食っていたが、連絡会のメンバーは、海外の情報をひたすら求めていたので、自分たちの中



故 日笠 端 氏

本会の元会長日笠 端氏には平成9年10月30日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

から情報を集める人間を出すことには、同情的であった。数々の批判を負って1年半の欧米遊学を終えて、昭和30年の始め帰朝、早速報告会を連絡会でさせていただいた。そして数年後、日笠先生が、欧米の都市計画の調査に派遣されることになり、その訪問先や調査項目などの相談にあずかった。9ヶ月13カ国の旅行はかなりの重荷であったが、無事こなされて、その後の先生の研究生活に限りない影響を与えた。

日本都市計画学会の発足にあたって、若手と言われた私共も、永い学会活動に参画する内に、それぞれ学会の会長をやらせて戴いた。

昭和39年、私共は、東京大学工学部の都市工学科の創設に参加した。教授8名、都市計画関係者5名、その4名は建築学科出身、土木工学科出身は私1人、土木工学科関係4名の内、3名は上下水道関係者で、都市計画関係者は私1人、孤塁を守る気持ちで赴任したが、日笠先生の実存は1つ

の安心であった。審議会等で席を共にして、更に深く先生の考え方を理解するようになった。先生は酒を愛された。その飲みぶりは、中国の昔の詩人を思わせた。しかし、酒杯は常に都市計画の議論に繋がった。キャンパスを吹き荒れた東大紛争も、お互いの理解に役だった。

傘寿を迎えた男が、喜寿の祝いを済ませて逝った友を偲ぶ。語りかける言葉は一つ。君安らかに眠り給え。私ももう左右に曲線を描くシュプールはやめて、直滑降で人生最後の馳せ場を下ろうぞ。

## 日笠 端先生の業績

慶応義塾大学教授

日 笠 康 雄

昨年10月30日、日笠 端先生が急逝された。7月に先生の77歳の誕生日を記念して、東大、東京理科大時代の先生の教え子が先生の喜寿の宴を行ったばかりで、そこでのご夫妻のお元気なご様子からは信じがたい訃報でした。昨年先生はこれまで都市計画に関して何を主張して来られたのかを過去に発表された著作をもとに改めて見直し、新たな発想を加えて市町村都市計画シリーズの刊行を思い立たれた。その席で、この3年間は出版の仕事に専念したいといわれ、刊行された第1巻「コミュニティの空間計画論」をご披露された。それに精力的に取り組まれて、第2巻が校了された矢先でのご逝去でした。

日笠先生は1920年、満州撫順でお生まれになり、1943年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業された。陸軍をへて、1946年に戦災復興院へ、1949年建設省建築研究所、1964年に創設されたばかりの東京大学工学部都市工学科教授に転じられた。さらに、1981年には東京理科大学工学部建築学科教授になられた。1996年3月に同教授を辞任されるまで、先生は研究所約18年、東大約17年、東京理科大約15年の計50年の研究生活を送られたことになる。

先生の研究領域は、戦後の50年をまさに一貫して生活都市計画の場にあった。都市の生活者を主体にその行動を追跡、分析して、住宅地の計画単位や施設の構成理論に総合し、都市計画の実践を

つねに見失わずに、現実の都市やその住環境の改良や計画に役立てるという研究であった。そこから、コミュニティ論という都市社会学の領域や土地利用計画、地区計画制度の比較制度研究、さらには商業施設の経営といった学際的領域に拡大していかれた。そうした学際的研究活動をつねにまとめ、主導する役割を果たされた。

こうした研究成果に対しては日本都市計画学会石川賞、日本建築学会賞などを受賞された。また、日本都市計画学会、日本建築学会をはじめ多くの学協会の役員を歴任され、日本都市計画学会では会長を勤められて、学会活動に貢献された。

一方、国、地方公共団体の数多くの各種審議会、委員会の委員、会長などを勤められた。特に、1970年代には自治省のモデルコミュニティ政策に大きな役割を果たされた。また、1980年の都市計画法、建築基準法一部改正による地区計画制度導入の際には、都市計画中央審議会、建築審議会相互の取りまとめの大役を果たされた。地区計画制度に関しては、先生が1961年に国連留学生としてヨーロッパの各国で見聞され、それ以来研究をされていて特別な思い入れがあったように思われる。

先生はまた、極めて数多くの研究業績を残されておられ、著書、論文、研究報告書の量は数百点に及び、代表的著書は土地問題と都市計画（東大出版会1981年）、都市計画第1～3版（共立出版1977・1986・1993年）、21世紀の都市づくり—地区の都市計画—（第一法規1993年）などがある。

先生は日頃から、自らを天邪鬼と評しておられたが、日本の都市計画の重要テーマを敗戦時に直観され、時流に流されず、それをかたくなに守ってこられたことを指しておられたように思う。また、都市計画の要諦は常識工学であると見透され、いたずらな高等理論に走らず、すべてをその柔軟な頭で咀嚼してバランスを配慮され、都市計画を専門家だけのものにしてはならないとお考えだったように思う。個人的には先生は大変な酒豪で、やさしく楽しいお人柄であった。暇がお嫌いで、亡くなる直前までベッドで仕事をされていた。